様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　5 月　29 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009 ～ 2011
課題番号：２１５３０６５２
研究課題名（和文）　中年・老年期の母村回帰志向を支える同郷コミュニティについての社会心理学研究
研究課題名（英文）　A social psychological field research on urban communities of home people in old age and home-oriented mentality.

研究代表者
石井　宏典　（ISHII HIRONORI）
茨城大学・人文学部・教授
研究者番号：90272103

研究成果の概要（和文）：　本研究は、沖縄都市圏において中年・老年期女性によって構成された２つの同郷コミュニティの諸実践に着目する。会合での参与観察をとおして、彼女たちの相互行為に３つの特徴を見出した。(1)老いへの対応。自分自身の身体の衰えや家族の介護体験についての語り合いをとおして互いに老いへの対応の仕方を学ぶ。(2)母村への心理的回帰。子ども時代のふるさとでの共通体験を語り合うことでルーツと連続性を確認する。(3) 笑いの効用。会合でできる笑いの渦が日常の不安や緊張からの一時的解放と視点の転換をもたらす。

研究成果の概要（英文）：　During postwar rehabilitation in Okinawa, many villagers came to urban area in search of jobs and settled down. As a result of participant observation in two urban communities of old-age women from a same village, I find three features of their interaction. (1) Members adjust to aging, making reference to other members' coping style. (2) They talk about their childhood and share home-oriented mentality. (3) Laughter relaxes tension and delivers them from daily anxiety.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・社会心理学
キーワード：コミュニティ、同郷、母村と都市、中年・老年期、つながり、老いへの対応、心理的回帰、 笑いの効用

１．研究開始当初の背景

(1)本研究立案の経緯と成果の発展

申請者はこれまで、沖縄本島北部に位置する諸集落の出身者たちが大阪や那覇などの都市に定着する過程において形成した同郷コミュニティを対象に、おもに職業的社会化過程の観点からフィールド研究を継続してきた。研究の進展にともない、国外の移動先にも調査地を広げ、平成 13～14 年には、文

科省の在外研究員として米国ハワイ州ホノルル市に１年間滞在して調査を展開した。20世紀初頭に集落を離れてハワイに渡った移民とその子孫たちの足跡をたどるとともに、ハワイにおける沖縄系コミュニティの現状を把握した。さらに、平成 15～17 年度科研費・若手研究(B)の助成を得て、那覇、大阪、ホノルル等をフィールドに調査を継続させた。なかでも、戦後の那覇において集落出身の女性たちが多く流れ込んだ衣料品卸市場の形成過程に着目し、市場での参与観察と 60 名を超える体験者へのインタビューを実施し、その成果をまとめた（石井宏典「ならいとずらしの連環」2008)。この調査の過程で、老年期を迎えた彼女たちが同郷性を軸にした多様な小集団を構成していることがみえてきた。これらの集団は、老年期を迎えた移住者たちの母村回帰志向を反映していることがうかがえ、かつて移住初期に都市での定着を支えた親族・同郷人結合とは性格を異にしていた。本研究ではこれらの集団を対象に中年・老年期にある離村者たちの現在について考察する。

(2)学術的位置づけ

本研究は、地域・文化間の移動にさいして家族や親族、同郷人関係、エスニック・コミュニティなどが担う諸機能を考察した研究の流れに位置づけられる。都市への移住と定着の過程を支える親族ネットワークの諸機能については、T. K. Hareven によるライフコース研究（Family time and industrial time, 1982）の知見と照らし合わせることができる。また、移民家族をとりあげた C. E. Sluzki の研究（Migration and family process, 1979）は、新旧環境の不連続性に直面する移住過程において家族が成員間の役割や機能を変化・分化させることで危機的場面に対応することを教える。この研究からは、移民家族が抱えることになる葛藤や対立を、過去や未来志向といった各成員の時間的展望に注目して考察するという観点を継承する。日本の都市における同郷会を対象にした研究によれば、同郷会は当初、職や住居の確保のための相互扶助という道具的機能をおもに担ってきたが、移動先での生活の安定化とともに次第に表出的機能を強めていき、出自的アイデンティティを確認するための場として位置づけられるようになった（石井宏典「職業的社会化過程における『故郷』の機能」1993 他)。本研究でとりあげる同郷人関係についても、こうした機能的変遷を考察する視点を共有し、さらにライフサイクルへの位置づけを重視することでより多角的な考察を試みることを目指した。

２．研究の目的

本研究は、沖縄の特定地域から国内外への人々の移動と定着の過程を対象にした一連の調査研究を受けて立案されたもので、中年・老年期を迎えた都市移住者たちが参加する同郷コミュニティ（同郷会や同窓会など同郷人同士のつながりを指す）の諸実践に着目する。その際、出身地域を軸にした重層的な共同性（親族・集落・町村・沖縄など）を活用しながら、個々の状況に適合したつながりが編み出される動態的な過程を成員たちのライフサイクルと交叉させて考察する。また、青壮年期に実行された出郷・定着過程と比較することで、中年・老年期にある移住者たちが編成している母村回帰志向的な同郷コミュニティの特質を明らかにする。さらに本研究を通じて、地域コミュニティの再生・再編成という今日的課題に取り組むための示唆を得ることを目的とする。

具体的には、沖縄本島北部の一集落の出身者を対象にして、沖縄本島中南部都市圏において編成されている諸集団をとりあげる。これらの集団形成を考察するにあたり、歴史状況と重ねる作業はもちろんのこと、当事者たちのライフサイクルに位置づけての理解が不可欠となる。これまで対象にしてきた青壮年期の人たちによる結びつきは、移動先での定住といった「将来を志向した現在」を支えるための活動が中心だった。その結合は、母村から都市に移行するさいの足場を与え、両者を媒介する緩衝空間となり、さらには生活の糧となる職業的社会化の現場を提供する役割を担ってきた（石井宏典「職業的社会化と同郷ネットワーク」2005)。一方、本研究の対象は、定住化の過程を経て中年・老年期に至った人たちが構成する諸集団であり、ここでは「過去への振り返りと現在」を結ぶような活動が中心となっている。参与観察とインタビューを丹念に重ねる作業をとおして、中年・老年期において母村回帰志向の同郷コミュニティが必要とされる背景を明らかにする。

３．研究の方法

(1)対象とした同郷コミュニティ

沖縄本島北部に位置する備瀬（びせ）集落の出身者を対象にしたこれまでの継続的な調査研究を受けて、本研究においては、沖縄本島中南部都市圏において形成された同郷コミュニティを対象とする。具体的には、①集落レベルの同郷性を基盤として構成された集団、および②集落レベルの同郷性に加えて、同性・同年代という共通項をもつ人たちで構成された集団、という２種の同郷人集団に分けられる。研究を進めるなかで、おもに②を対象に定め、参与観察とインタビューを重ねた。

①集落レベルの同郷人会
　沖縄本島中南部都市圏において戦後の移住初期に組織され現在まで活動を継続してきた、集落レベルの２つの同郷人会。ひとつは、商業・行政の中心地である那覇で 1954 年に結成された那覇近郊在住備瀬郷友会、もうひとつは普天間米軍基地建設を契機として周辺に集住した人たちによって 1956 年に結成された中部備瀬郷友会。
②同郷・同年代の女性による集団
　老年期女性たちによって構成された２つの同郷人集団。ひとつは、移動先での同業体験者が核となって結成され、現在は 1920～1930 年代生まれの人たちが集う「福女会」、もうひとつは、1937 年生まれの同郷・同級生の女性たちが集う「蛍会」。
(2)方法
①各会合での参与観察
　対象集団の会合において参与観察を実施した。詳細なメモを作成するとともに、会合場面の一部をビデオカメラで撮影し、会話内容、話題の展開、相互行為についての特徴を把握した。
②成員へのインタビュー調査
　個々の成員を対象に、都市への移動から定着そして現在に至るまでの過程について、ライフストーリーの聞きとりを実施した。最初に、当該集団の形成過程で中心的役割を果たした人物へのインタビューによってこれまでの経緯を把握した後、その他の成員に対象を広げた。おもな質問項目は以下のとおり。a. 集団形成の経緯、設立時の様子（特に中心人物に）、活動の変遷。b. 各成員のライフサイクルと家族史（学校体験、紡績体験、戦争・戦後体験）、職業的社会化の過程。c. 同郷ネットワーク（家族・親族のつながり、集落・町村単位の同郷会）との関わり。d. 中年・老年期にある現在、同郷会の活動に参加することの位置づけ。e. 次世代に継承させようとする社会文化的諸側面（ことば、祖先崇拝などの信仰、親族関係、食生活、伝統行事での踊りなど）。
③ 関連資料の収集と考察
　各集団の節目に発刊された記念誌や会員名簿など、集団ごとに関連する資料を集め、それぞれの歴史的変遷についての考察や集団間の相互比較をおこなった。
④母集落行事への参与観察とインタビュー
　旧暦７月に女性たちによって担われる母村の伝統行事「シニグ」には、ふるさとを離れた中年・老年期の女性たちも多数参加する。彼女たちの母村回帰志向によって支えられてもいるこの行事を３年間にわたって詳細に記録し、その集合原理を探った。また、その他の年中行事においても参与観察を重ねるとともに、これまで年中行事を中心に担ってきた神役である老年期女性を対象にしたインタビューを行った。

４．研究成果

(1)対象とした同郷コミュニティの概要
　老年期にある女性たちによって構成された２つの集団を対象にして、成員へのインタビューを重ね、結成から現在までの変遷を把握した。
①「福女会」
　1980 年に 60 代を迎えていた同郷女性６名で結成し、30 年を超える歴史をもつ。福女会の「福」は郷里のシンボルである福木並木にあやかり、設立時の会員は、戦前に本土各地の紡績工場で働き、戦後には那覇の衣料品市場で働いてきた体験を共にしていた。現在の会員 23 人は 70～80 代であり、高齢化の進展なかで新旧会員が入れ替わってきた。近年は 20 人規模で推移している。この間、会員たちは自らも老いを迎える過程を経てきており、現在は、夫の看病や介護そして看取りを体験する者が続いている。月に一度の親睦模合の場が活動の中心。模合は元来、経済的相互扶助の仕組みであったが、ここではおもに親睦・交流の場を提供する機会となっており、飲食を共にしながら互いの近況を伝え合い、子どもの頃の母集落や母校（謝花尋常高等小学校）での思い出話で盛り上がる。長い間、特定会員の自宅が会場として提供されていたが、５年前からは那覇の中心部にある古いホテルに移った。集合の時間帯も夜から昼となり、毎月 20 日の昼食時に固定された。また、結成いらい現在まで、母集落での伝統行事（旧暦７月のシニグ行事と４年に一度の豊年祭など）への参加をとおして交流を重ねてきた。
②「蛍会」
　結成以来、20 年余りが経過しており、会員は、1937 年生まれの同郷・女性同級生どうしという特徴がある。現在は、70 代となった 19 名で構成。沖縄戦時に小学２年生であった。戦後に通った中学校では転出者が続き、同じ集落からの同級生男女各 30 人合計 60 人ほどのうち、卒業まで残ったのは約半分で、残りは中南部に引っ越した。会員のうち高校進学者は１人のみで、他は中学校卒業後に中南部および大阪で就職している。大阪での就職者４人はいずれも同郷人経営のメッキ工場で働いた。1990 年代、子育ても一区切りした 50 代半ば、同級生男性の不幸が続いたのをきっかけに、女性たちが集うようになる。これまで、月に一度の模合、年に一度の旅行を重ねてきた。近年は親の介護を抱える人が続き、模合のみ継続。日常的にも互いにこまめに連絡を取り合っている人も少なくない。2000 年代に入ってからは、母集落の伝統行事シニグが踊り手不足ということもあって、会員がま

とまって参加している。現在の模合は、毎月第二土曜日の昼食時に宜野湾市内の国道沿いにある和食レストランの一室で行われている。

(2)同郷コミュニティでの相互行為の特徴

２つ模合の場での参与観察を重ねることで、それぞれの会合での相互行為について以下の３つの特徴を見出した。

①老いへの対応（予期的社会化）

福女会は結成から 30 年たつなかで、会員たちは順次、家族の看護や介護そして看取りを体験するとともに、自分自身の身体の衰えに直面してきた。夫の介護などでしばらく会合を休んでいた者も、看取りを終えた後には仲間に促されて再び会合に顔を出すようになる。彼女たちは、似たような体験を経た仲間たちとの交流をとおして次第に気持ちの整理をつけていく。また、老いの体験について語り合うことは、老いへの対応の仕方を互いに学び合う機会となっている。福女会の場合、会員の年齢に 20 年ほどの開きがあるため、年長者が示す老いへの対応は後続者にとってはモデルの提示になっている。蛍会でも会員は 70 代となり、親の介護や夫との死別を体験した者が出はじめ、会合では、互いの身体の変化について話題になることも多い。老いによる心身の変化をまださほど感じていない人も含め、他の人たちの様子を見聞きすることは、近い将来に自分にも生じる変化を予期させる。会合は、現況を伝え合うことで自身の体験を相対化しつつ、老いへの構えを育むという予期的社会化の場となっている。

②子ども時代のふるさとへの心理的回帰

会合では、ふるさとでの子ども時代のことがよく語られる。水が乏しく山も遠かった土地柄から、共同井戸での水汲みと山への薪取りが戦前・戦中世代の共通体験であった。その他、畑仕事や家畜のための草刈り、浜辺でのイモ洗い、学校での出来事などが話題に上る。食事をとりながらの席ということも作用してか、幼いころの食にまつわる思い出話も多い。福女会では長い間、特定会員の自宅で彼女が作った家庭=郷土の料理を味わいながら話に花を咲かせてきた。蛍会では、子ども時代の思い出の味である「チーイリチャー（新鮮な豚の血を使った肉と野菜の炒めもの）を旧正月の前にみなで集まり作って食べるという機会を設けている。かつて年の瀬のふるさとでは、豚の解体作業後にだけありつけるこの料理をみな心待ちにしていた。

参加者たちの語り合いには、このように子ども時代の振り返り（過去への時間的展望）が特徴的である。他郷に暮らす者どうしがふるさとでの共通体験を語り合い、ときには思い出の食を味わい合うことは、自分たちの根元（ルーツ）を確認し、過去と現在とを結ぶ作業となっている。また、集落内外の具体的な場所にまつわる体験を語り合うことが、彼女たちにたしかな手応えを与えることがうかがえた。

③笑いの効用

会員たちは、月に一度の模合の日を心待ちにしている。福女会と蛍会のいずれもが、昼食の時間帯の会合であるため、食事を共にしながらの語り合いとなる。このとき、ムードメーカーの役の会員の語りを軸に笑いがつぎつぎと起こる。子ども時代のことを笑いとともに想起するだけでなく、介護や自身の老いといった、ひとりで抱え込むと反芻して深刻になってしまうような話題も、みんなで笑い話にしてしまう。このように会合で生じる笑いの効用については、「いやなことがあっても、一人で抱え込んでいないでみんなで集まって話をすると、（いやな思いは）散ってなくなっている」という、福女会のある会員の発言に象徴される。笑いによる場への没入は日常の不安や緊張からの一時的な解放をもたらし、反芻により固着していた視点の転換をもたらす。

(3)伝統行事への参加

母集落で旧暦７月に女性たちが中心となって担われる伝統行事シニグの山場は、集落の祖霊神が祀られた神殿の前での舞いである。このとき、２つの同郷コミュニティの会員を含め、ふるさとを離れた中年・老年期の女性たちも多数参加する。彼女たちの参加は、中年・老年期になって強まった母村回帰志向によって支えられている。紺地の着物に着替え頭にはマンサージ（鉢巻き）を締め、自分の根元（ルーツ）である場所に身をおき、踊りの輪に加わることは、遠く離れたふるさとの暮らしと都市での今の生活とのあいだの距離を縮め、過去から現在までの連続性を身体で確かめる作業となっている。

なお、本研究では、シニグ行事だけでなく、その他の年中行事でも参与観察を行うとともに、それらの中心的担い手である神役の女性たちを対象にインタビューを重ねた。そして、これまで年中行事を支えてきた世代を対象にして、戦前の紡績女工体験についての成果をまとめた（石井宏典「紡績工場にできたたまり場―戦前期における沖縄一集落出身女工の体験―」2012）。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①<u>石井宏典</u>、『紡績工場にできたたまり場―戦前期における沖縄一集落出身女工の体験―』、茨城大学人文学部紀要「人文コミュニケーション学科論集」、12 号、29-62、2012、

査読無

〔学会発表〕(計２件)
①石井宏典、『豊作祈願と収穫感謝―実感から象徴へ』(シンポジウム：農と食と心理学)、日本質的心理学会第８回大会、2011.11.26、広島
②石井宏典、『沖縄の一集落とその出身者を対象にした調査から』(シンポジウム：フィールドワーク)、日本質的心理学会第７回大会、2010.11.27、水戸

６．研究組織
(1)研究代表者
石井　宏典　(ISHII HIRONORI)
茨城大学・人文学部・教授
研究者番号：90272103